出雲市の文化財報告　21

林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

聖谷奥Ⅰ遺跡

2012年3月

出雲市教育委員会

林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

聖谷奥Ⅰ遺跡

2012年3月

出雲市教育委員会

聖谷奥Ⅰ遺跡全景（北から）

1　2号炭窯跡遺構検出状況（西から）

2　石垣完掘状況（北西から）

序

林道宮本聖谷線は，島根県出雲市多伎町小田地区と奥田儀地区を結び効率的な森林管理を可能にするため，また地域住民の交通状況の改善等を目的として，島根県出雲県土整備事務所によって平成９年から林道整備が行われています。

出雲市教育委員会では，島根県出雲県土整備事務所からの委託を受け，平成23年３月から７月に林道宮本聖谷線開設事業予定地内において聖谷奥Ⅰ遺跡の発掘調査を実施してまいりました。本書は，その調査成果をまとめたものです。

聖谷奥Ⅰ遺跡が所在する出雲市多伎町は，近世には田儀櫻井家によりたたら製鉄業の盛んな地でありました。製鉄の燃料である木炭を生産する炭窯跡が確認されたことは，この地域の歴史を解明していく上で，貴重な資料を得ることができました。

本書が多少なりともこの地域の埋蔵文化財に対する理解と関心を高め，また歴史学習の助けとなれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査及び本書の作成にあたりご理解とご協力を賜りました地元の皆様，島根県出雲県土整備事務所をはじめ，関係各方面の方々に対し心から厚くお礼申しあげます。

2012年３月

出雲市教育委員会
教育長　中　尾　一　彦

例　言

1．本書は，島根県出雲県土整備事務所の委託を受けて出雲市教育委員会が平成23年（2011）３月から７月に実施した，林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査は次の組織で行なった。

調査主体　出雲市教育委員会
調査指導　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
　　松尾充晶（島根県教育庁文化財課文化財保護主任）
事務局　花谷　浩（出雲市文化環境部学芸調整官）
　　石飛幸治（出雲市文化環境部文化財課長）〔平成22年度〕
　　福間　浩（出雲市文化環境部文化財課長）〔平成23年度〕
調査員　遠藤正樹（　同　主任）〔平成22年度〕
　　景山真二（　同　係長）〔平成23年度〕
調査補助員　糸賀伸文，勝部真紀（以上　同　文化財課臨時職員）

3．発掘作業員（50音順，敬称略）

伊藤　伸，大輝正人，奥山利晃，金森光雄，川上晴夫，周藤俊也，花田増男，柳楽　晃，新山幸男，星野篤史，森山節郎

4．室内整理作業員（50音順，敬称略）

吹野初子，細野陽子，前島浩子

5．発掘調査および報告書作成にあたって，次の方々からご指導，ご協力を賜った。記して謝意を表する。（敬称略，順不同）

日野豊美，角矢永嗣，株式会社安井組

6．本書で使用した測地系は，世界測地系座標系第Ⅲ系，方位は座標北を示し，標高は海抜高を示す。

7．自然科学分析は，株式会社文化財調査コンサルタントに委託し，結果を第４章に掲載した。

8．本書の執筆及び編集は景山が行った。

9．作成した図面，写真等は出雲市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果 …… 8
第１節　調査の概要 …… 8
第２節　１号炭窯跡の調査 …… 10
第３節　２号炭窯跡の調査 …… 12
第４節　石列の調査 …… 15
第５節　石垣の調査 …… 16

第４章　聖谷奥Ｉ遺跡における AMS 年代測定 …… 17

第５章　総括 …… 19

挿図目次

第１図　聖谷奥１遺跡周辺の主要遺跡
第２図　聖谷奥Ｉ遺跡位置図
第３図　聖谷奥Ｉ遺跡平面図
第４図　聖谷奥Ｉ遺跡遺構配置図
第５図　聖谷奥Ｉ遺跡土層断面図
第６図　１号炭窯跡平面図・立面図
第７図　２号炭窯跡平面図（１）・石列平面図
第８図　２号炭窯跡土層断面図
第９図　２号炭窯跡平面図（２）
第10図　２号炭窯跡煙道立面図
第11図　２号炭窯跡平面図（３）
第12図　２号炭窯跡平面図（４）
第13図　石列立面図
第14図　石垣立面図
第15図　暦年較正図
第16図　２号炭窯跡造り替え模式図
第17図　聖谷奥Ｉ遺跡周辺図

図版目次

巻頭カラー１　聖谷奥Ｉ遺跡全景（北から）
巻頭カラー２－１　２号炭窯跡遺構検出状況(西から)
巻頭カラー２－２　石垣完掘状況（北西から）
図版１　聖谷奥Ｉ遺跡完掘状況（北から）
図版２－１　聖谷奥Ｉ遺跡調査前全景(北西から)
図版２－２　調査前の石垣の状況（北西から）
図版３－１　１号炭窯跡検出状況（南西から）
図版３－２　１号炭窯跡検出状況（北から）
図版４－１　１号炭窯跡調査状況（北から）
図版４－２　１号炭窯跡調査状況（北から）
図版４－３　１号炭窯跡完掘状況（南から）
図版５－１　２号炭窯跡周辺遺構検出状況(西から)
図版５－２　石列検出状況（北東から）
図版６－１　２号炭窯跡検出状況　(南西から)
図版６－２　２号炭窯跡奥壁検出状況(北から)
図版６－３　２号炭窯跡甲の半裁状況(南西から)
図版６－４　２号炭窯跡調査状況（南西から）
図版７－１　２号炭窯跡煙道部検出状況(西から)
図版７－２　２号炭窯跡調査状況（西から）
図版８－１　２号炭窯跡調査状況（北から）
図版８－２　２号炭窯跡煙道検出状況(北西から)
図版９－１　２号炭窯跡床面検出状況(南西から)
図版９－２　２号炭窯跡排水溝検出状況(南西から)
図版９－３　２号炭窯跡調査状況（西から）
図版10－１　２号炭窯跡完掘状況（西から）
図版10－２　粉炭面断ち割り状況（北から）

第１章　調査に至る経緯と経過

林道宮本聖谷線は，島根県出雲市多伎町小田地区と奥田儀地区を結び効率的な森林管理を可能にするため，また地域住民の交通状況の改善等を目的として，島根県出雲県土整備事務所（以下出雲県土整備事務所という）によって平成９年（1997）から林道整備が行われている。出雲市文化財課は，平成22年（2010）５月10日に出雲県土整備事務所から国史跡聖谷たたら跡周辺より南の総延長500mの事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会があった（第２図）。５月12日に分布調査を実施し，国史跡聖谷たたら跡から南へ300mの急峻な谷あいを流れる聖谷川沿いの河岸段丘に，石垣を築いた南北に細長い平坦面を確認し，造成された可能性が高いと考え，発掘調査が必要であることを文書で回答した。さらにこの遺跡の範囲及び内容を把握するために，11月25日に範囲確認調査を実施，地表下約50cmで粉炭層を確認したため，周囲に炭窯が存在することを考えた。12月４日に「遺跡の発見届」を島根県教育委員会（以下県教委という）に提出した。これを受けて出雲市は，出雲県土整備事務所と発掘調査の委託契約を12月13日に締結し，調査に着手することとなったが，年末から年明けにかけて近年にない大雪に見舞われ，さらに１月は断続的に雪が降ったため，雪解けを待って３月１日に発掘調査に着手した。

今回の調査で確認した炭窯跡は，この地域の製炭の歴史を考える上で貴重な資料であった。しかし林道宮本聖谷線が森林管理の効率化および地元住民の交通の利便性を考えると重要な事業であり，また急峻な谷筋を切り開いて林道を開設されるため，ルート変更はできにくい状況であった。このような状況を踏まえ県教委と協議した結果，遺跡を記録保存に留めることとなった。

写真１　トレンチ調査の状況（西から）

林道宮本聖谷線事業において過去には，旧多伎町教育委員会が屋形遺跡（第３図９）を平成16年（2004）に，茗ヶ原奥たたら跡（第３図27）を平成16・17年（2004・2005）に発掘調査を実施している。

関係する文書

平成22年（2010）

５月10日　「林道宮本聖谷線にかかる埋蔵文化財確認調査」を出雲県土整備事務所から市教委へ依頼

６月３日　踏査の結果，事業予定地内に遺跡が存在し発掘調査が必要である旨を文書で回答する

８月４日　林道宮本聖谷線の発掘調査依頼を出雲県土整備事務所から市教委へ

12月７日　範囲確認調査の結果を市教委から出雲県土整備事務所に文書で報告する

12月13日　「平成22年度林道開設事業　聖谷奥Ｉ遺跡発掘調査業務委託契約」出雲県土整備事務所と出雲市

12月24日 「遺跡（聖谷奥Ⅰ遺跡）の発見届」を市教委から県教委へ

平成23年（2011）

1月20日 「埋蔵文化財発掘の通知」を出雲県土整備事務所から市教委経由で県教委へ

2月14日 「埋蔵文化財発掘調査の通知」を市教委から県教委へ（平成22年度調査）

3月24日 「平成22年度林道開設事業　聖谷奥Ⅰ遺跡発掘調査業務委託変更契約」出雲県土整備事務所と出雲市

3月24日 「平成22年度林道開設事業　聖谷奥Ⅰ遺跡発掘調査業務委託変更契約」出雲県土整備事務所と出雲市

4月6日 「埋蔵文化財発掘調査の通知」を市教委から県教委へ（平成23年度調査）

6月20日 「平成22年度林道開設事業　聖谷奥Ⅰ遺跡発掘調査業務委託変更契約」出雲県土整備事務所と出雲市

7月15日 「林道開設事業　聖谷奥Ⅰ遺跡発掘調査業務委託完了報告書」出雲市から出雲県土整備事務所へ

7月15日 「聖谷奥Ⅰ遺跡発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委

7月21日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ

7月21日 「埋蔵文化財の保管証」市教委から県教委へ

7月25日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ

8月4日 「遺跡の取り扱いについて（通知）」県教委から市教委へ

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

遺跡の位置する出雲市は，島根県東部（旧出雲国）の西部地域に位置する。面積は，624.12km²。出雲市役所本庁舎（出雲市今市町）は，北緯35度22分1秒，東経132度45分16秒に位置する。北部は島根半島，中央部は出雲平野，南部は中国山地に接し，北流する一級河川斐伊川，神戸川さらに宍道湖とも接する。平成17年（2005）3月に旧出雲市，平田市，湖陵町，佐田町，多伎町，大社町の2市4町が新設合併し，さらに平成23年（2011）10月に斐川町が編入合併し，新出雲市となった。

出雲市多伎町の山系は概ね南北に走り，山容は東より西に至るに従い急峻となり海岸近くまで迫っている。この山系に沿い田儀川，小田川，久村川の3河川が日本海に注いでいる。聖谷奥Ⅰ遺跡は，小山川上流の聖谷川沿いにあり，南北にのびた細い谷筋の河岸段丘上に位置する。第3図がほぼ遺跡の範囲で，遺跡の西側を南北に流れる聖谷川と，遺跡の北端を東の谷から流れている小川との合流地点である。聖谷川沿いには幅の狭い平坦面が，聖谷奥Ⅰ遺跡300m下流の国史跡聖谷たたら跡のあたりから上流にかけて数100mにわたって続いている。

第2節　歴史的環境

出雲市多伎町を中心に歴史的なあゆみを概観したい（第1図・第1表）。

1．旧石器時代

近年，発掘調査が実施された多伎町多岐字砂原所在の砂原遺跡（19）からは，約12万年前とされる石片が確認されており，石器であることが確実となれば，日本最古段階に位置づけられる遺跡である。

2．縄文時代

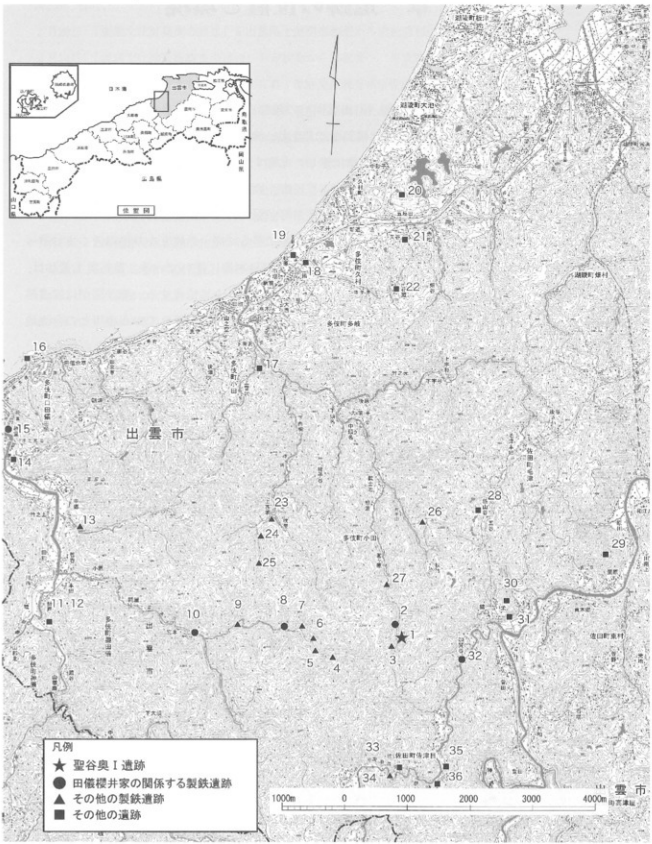
遺物（土器・石器）は各地で採取されているものの，今のところまとまった遺物，遺構は確認されていない。多伎町奥田儀においては，屋形遺跡（9）より黒曜石製の石鏃及び剥片が出土している。また同小田菅沢地内でも打製石器（尖頭器，石鏃，スクレイパー）や磨製石器（石斧）などが採取されている。

3．弥生時代

久村の矢谷遺跡（21）から弥生前期の広口壺が1点出土している。この土器の底部には籾の圧痕が残されており，弥生前期にはすでに周辺で稲作が行われていたことを示す資料である。

4．古墳時代

確認されている古墳としては，経塚山古墳（14），原の古墳（11），砂原小山横穴墓群（18）などがある。発掘調査が実施されたのは，経塚山古墳である。田儀小学校敷地内の小丘陵に所在する。この古墳は昭和10年（1935）ごろ県道拡張工事のおりに初めて発見され，箱式石棺とともに人骨・鉄剣が出土したといわれる。昭和26年（1951），山本清氏によって発掘調査が行われ，丘陵頂上付近に小規



第1図　聖谷奥Ⅰ遺跡周辺の主要遺跡

第1表　聖谷奥Ⅰ遺跡とその周辺遺跡

番号	遺跡名	種別	所在地	概要	備考
1	聖谷奥Ⅰ遺跡	生産遺跡	出雲市多伎町奥田儀	炭窯跡，石垣	本書所収
2	聖谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	製鉄遺構，池状遺構，石垣，鉄滓，陶磁器	国指定 発掘調査
3	聖谷奥Ⅱ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
4	屋敷谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	製鉄遺構，鉄滓	発掘調査
5	屋敷谷Ⅲ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
6	屋敷谷Ⅱ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
7	屋敷谷Ⅰ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
8	掛幅たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀掛幅	製鉄遺構，石垣，鉄滓，陶磁器	発掘調査
9	屋形遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	鉄滓，陶磁器，石垣，黒曜石	発掘調査
10	宮本鍛冶山内遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀宮本	田儀櫻井家による製鉄跡（屋敷跡，田儀櫻井家当我寺，墓，金屋子神社，鍛冶屋跡，山内跡，）陶磁器，鉄滓	国指定 発掘調査
11	原の古墳	古墳	出雲市多伎町奥田儀	横穴式石室	
12	三嶋清右衛門の供養塔	古墓	出雲市多伎町奥田儀		
13	畠井谷鍛冶屋跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町口田儀		
14	経塚山古墳群	古墳	出雲市多伎町口田儀経尾谷口	4基確認，箱式石棺，竪穴式石室，石枕，人骨，玉類，土器類，刀剣	外形消滅
15	奥谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	近世たたら跡，鉄池状遺構，石垣，鉄滓，陶磁器	国指定 発掘調査
16	口田儀台場跡	台場跡	出雲市多伎町口田儀町内		
17	富士ヶ城跡	城跡	出雲市多伎町小田菅沢	山城（郭，帯郭，堀切，土塁，虎口，櫓台）宝篋印塔	遺構一部破損
18	砂原小山横穴墓群	横穴墓	出雲市多伎町多岐砂原	家形表入，須恵器	1基消滅
19	砂原遺跡	散布地	出雲市多伎町多岐砂原		
20	雲州久邑長沢焼窯跡	窯跡	出雲市多伎町久村長沢山	登り窯，石敷，窯道具，陶磁器，陶台	県指定
21	久谷遺跡	散布地	出雲市多伎町久村	弥生土器	
22	華蔵寺	寺院	出雲市多伎町久村		
23	西明原の溜たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	鉄滓	
24	西明原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	石垣，鉄滓	
25	壷のそねたたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	鉄滓	
26	道ヶ崎たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田道ヶ崎	石垣，鉄滓	
27	茗ヶ原奥たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小出	たたら跡，陶磁器，銅銭，鉄滓	発掘調査
28	銀山谷銅山跡	製銅遺跡	出雲市佐田町一窪田銀山谷	竪穴坑	
29	吉栗山城跡	城跡	出雲市佐田町一窪田栗原	山城（郭，腰郭，堀切，土塁）	
30	伊秩城跡	城跡	出雲市佐田町一窪田錦	山城（郭，帯郭，腰郭，竪掘，連続竪堀，土塁，虎口，馬出，櫓台）	遺構一部破損
31	智光寺古墓	古墓	出雲市佐田町一窪田錦	宝篋印塔・五輪塔他	
32	加賀谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町一窪田加賀谷	金屋子神社，石垣，元小屋	
33	中佐津目銅山精錬所跡	製銅遺跡	出雲市佐田町佐津目宮田	鉱滓	
34	佐津目たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町佐津目		
35	下佐津目銅山精錬所跡	製銅遺跡	出雲市佐田町佐津目長谷	鉱滓	
36	三味線坑銅山精錬所跡	製銅遺跡	出雲市佐田町佐津目糸ヶ谷	鉱滓	

『増補改訂　島根県遺跡地図Ⅰ』（島根県教育委員会，2003年）ほかによる

模な古墳が4基確認されている。そのうち1基は6m×5.5m・高さ1mの方墳で，竪穴式石室の様相を帯びた箱式石棺をもち，副葬品として滑石製の勾玉・碧玉製管玉が出土した。これらの出土品などから経塚山古墳は中期の古墳と推定される。

5．奈良時代

天平5年（733）に撰上された『出雲国風土記』に，多伎地域は「多伎郷。郡家の西南二十里，大下造らしし大神の御子，阿陀加夜努志多伎吉比売命座しき。故，多吉と云ふ。神亀三年に，字を多伎と改む。」と記されている。

6．平安・鎌倉・室町時代

多伎町久村の華蔵寺（22）には，平安時代中期に造られた毘沙門天立像（出雲市指定文化財）が残されている。

製鉄関連の遺跡としては，佐田町上橋波の権原遺跡で14世紀頃の製鉄炉（V区2号炉）と精錬鍛冶炉（V区1号炉）が確認されている。また，多伎町奥田儀の屋敷谷たたら跡（4）が操業されていたのは15世紀の操業と考えられ，すでに室町期に製鉄工人集団の活動が確認できる地域であった。

7．戦国時代

多伎町は石見国と国境を接し，尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防の舞台となった。多伎町小田の富士ヶ城跡（17），口田儀の鶴ヶ城がある。鶴ヶ城は，尼子経久が勢力を広げた大永年間に，その配下にあった小野玄蕃守が西方からの守りに築いた山城である。この城は毛利元就による2度の侵攻を防いだが，元亀3年（1572）に元就の孫毛利輝元の城攻めにより落城，後に田儀城と改められた。この城攻めに貢献したのが，口田儀出身の銅山師三嶋清右衛門である。清右衛門は，応永年間に出雲国鷲浦（出雲市大社町）で銅山を発見し開発を行った人物である。また，清右衛門は博多の豪商神谷寿禎に乞われて石見銀山の再開発に協力し，鷲銅山の技術者を動員して銀鉱石を採掘したことでも知られる。奥田儀蔵谷地区には，三嶋清右衛門の供養塔（12）と伝わる石塔が残っており，その正面の銘文には慶長5年（1600）の年号が見られる。多伎町内に残る石造物として貴重な資料である。生産遺跡としては，16世紀後半～17世紀後半に操業したとされる茗ヶ原奥たたら跡（27）があり，一部排滓場を発掘調査している。中世末から近世につながるたたら跡であり，田儀櫻井家操業開始前後の時期のたたら跡として注目される。

8．江戸時代

江戸期の多伎町の歴史で特筆されるのが，櫻井家の進出である。田儀櫻井家は，江戸初期に仁多郡上阿井村（奥出雲町上阿井）の櫻井家3代三郎左衛門直重（可部屋初代）が神門郡奥田儀村へ来村し，製鉄業を開始した。その後，直重の嫡子幸左衛門直春（田儀櫻井家初代）は，可部屋から分家し，上阿井村から奥田儀村に移り住み製鉄業を行っている。10代多四郎直敬は，文化9年（1812）ごろに，仮小屋から家普請をして住居を構え，「御用宿」を勤めた。また，文政4（1821）年に智光院を出雲市佐田町一窪田から宮本の地に移転勧請し，田儀櫻井家の菩提寺とした他，山内の農地開発も行った。

聖谷たたら跡（2）には，享保19年（1734），田儀櫻井家4代当主の宗兵衛清矩の造立の銘が残る地蔵1体が置かれていたことや，地下構造から出土した陶磁器の年代が18世紀前半であることから，

田儀櫻井家の初期のたたら場であることがわかっている。

寺院跡としては，佐田町一窪田の伊秩城跡南側山裾に智光寺跡がある。伊秩甲斐守重政が松江菩導寺の末寺として一窪田へ勧請したものである。明和７年（1770）の洪水で施設が倒壊し，廃寺となった。これを田儀櫻井家10代多四郎直敬が現在地の出雲市多伎町奥田儀の宮本鍛冶山内遺跡（10）へ移転勧請している。

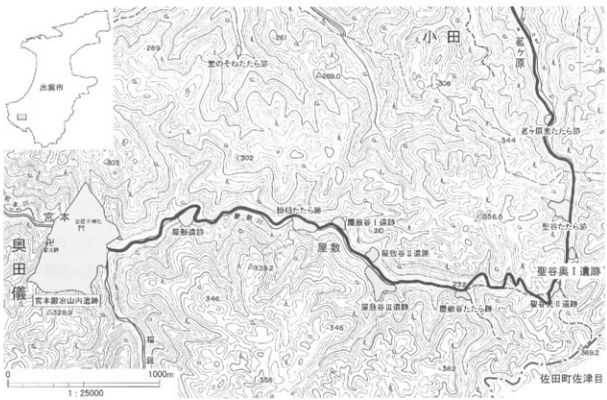
９．近代・現代

田儀櫻井家12代勝之助直明は，製鉄業の他に蚕種製造業，銀行設立など多角経営を行なったが成功に至らなかった。また明治15年（1882）の大火により本拠地宮本が全焼したことが決定打となり，明治23年（1890）に直明はたたら製鉄業の経営を断念し，奥田儀を去り，鉄山経営は終焉を迎えた。

また，田儀櫻井家が最後に経営したとされる加賀谷たたらは，佐田町一窪田に所在しており，金屋子神社，元小屋跡などが残されている。

昭和初期，国内で戦時体制が強化されるなか，鉄鉱資源の重要性が高まるようになる。そのため，多伎町久村の矢谷地区では，日立製作所の分工場が昭和16年（1941）から砂鉄採取を目的として操業された。採鉱は坑内掘りと露天掘りの両方で行われた。この鉱山で採れる砂鉄の含有量は，25～40％と高い。粗鉱は約500mの間は軌道にのせて運び，選鉱場で破砕，精査され，砂鉄の純度を高めた。それをトラックに積んで小田駅に運び，安来工場に送って製錬していたとされる。

このように，多伎地域が14～20世紀まで製鉄と深い関わりがあったことがわかっている。

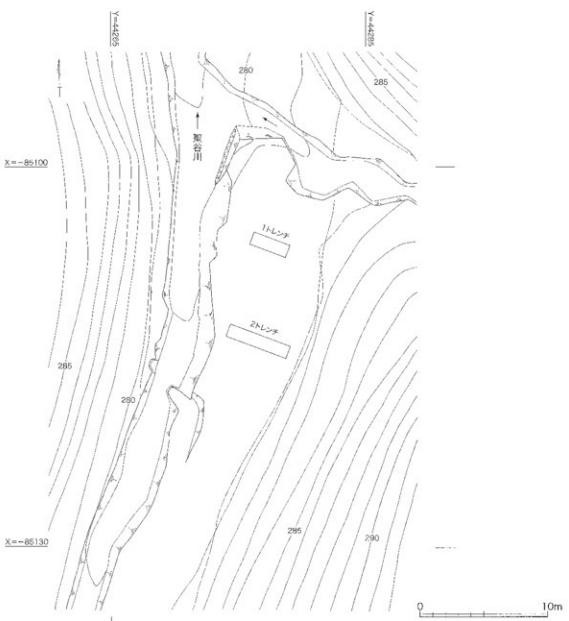


第２図　聖谷奥Ⅰ遺跡位置図（太線は林道宮本聖谷線）

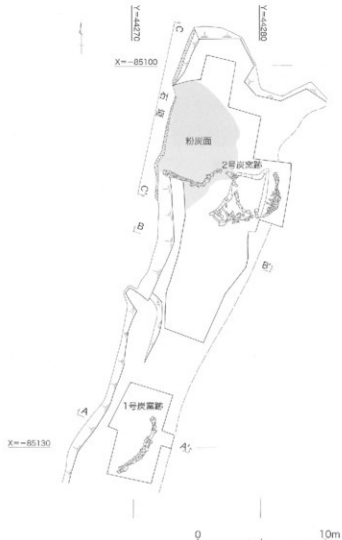
第3章　調査の成果

第1節　調査の概要

林道宮本聖谷線の事業予定地内における埋蔵文化財の分布調査を平成22年（2010）5月12日に実施し，国史跡聖谷たたら跡から南へ300mの急峻な谷あいを流れる聖谷川沿いの河岸段丘に，石垣を築いた南北に細長い平坦面を確認した。さらに遺跡の範囲及び内容を把握するために，平成22年11月25日から30日の間でトレンチ調査を実施した。細長い平坦面に直行するようにトレンチを東西方向に，



第3図　聖谷奥1遺跡平面図（1：300）



第4図　聖谷奥1遺跡遺構配置図（1：300）

幅1m，長さ3～5mのトレンチを設定し，人力掘削により調査を行い，地表下約60cmに粉炭層を確認した。

この結果を受けて12月14日に県土整備事務所と発掘調査業務委託を締結し，調査に着手することとなったが，年末から年明けにかけて近年にない大雪に見舞われ，さらに1月は断続的に雪が降ったため，雪解けを待って3月1日に発掘調査に着手した。

写真2　調査指導風景（西から）

最初に基本的な層序を確認するために，調査区中央と南端の2ヶ所にトレンチを設定した。これを基に表土掘削を行ったが，現地に重機が入れられない状況だったので人力で行った。細長い調査区であり，常時6～7人程度しか作業に投入できないうえ，一輪車で土を場外へ搬出しなければならなかったので，予想以上に手間がかかった。結果的には5月の連休明けには2ヶ所の炭窯跡と2号炭窯跡周辺の石列，石垣がさらに南側に延びていることを確認した（第4図）。表土からは近代の陶磁器片が数点出土したが，遺構に伴って出土した遺物がなかったため，時期を決定付けることができなかったので出土炭化物の年代測定を行った。その結果を第4章に掲載した。

調査中に島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏や島根県文化財課の松尾充晶氏の調査指導を受け，7月14日に無事調査が終了した。

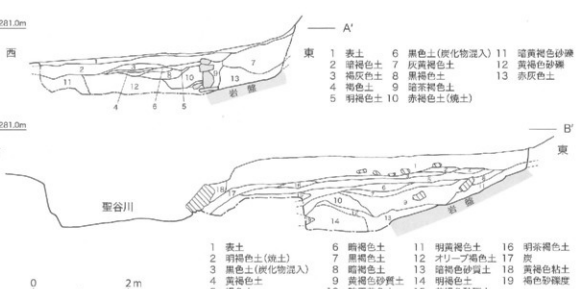
第2節　1号炭窯跡の調査

1．基本層序（第5図　A-A′）

調査区の土層を確認するために南端にトレンチを設定した。結果的には1号炭窯跡を断ち割るような位置に設定していたことになる。窯壁の積み石が断面に露出している。11・12層は円礫や角礫，砂などが多いことから，聖谷川の洪水による土石流が堆積している可能性が高い。10層はその際に炭窯の中が落ちた一部であると考えられる。

2．遺構（第6図）

1号炭窯跡は調査区の南端，聖谷川に平行するように築かれている。遺構の大半は聖谷川の土石流で壊れているが，山側の部分の窯壁の積み石を確認した。積み石の天端の一番高いところの標高が280.4m。地表下25cmの9層上面から掘り込んで石を積んで窯壁を築く半地下式の構造である。平面

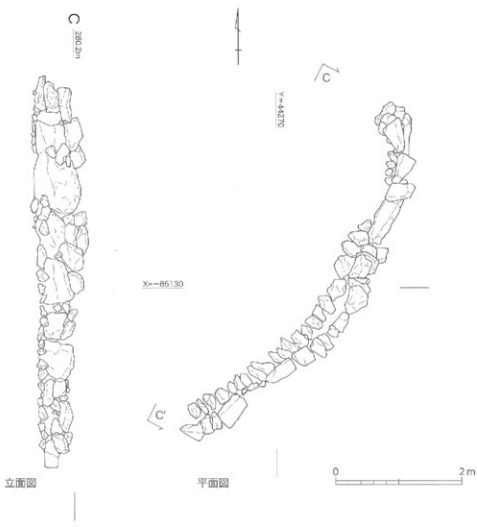


第5図　聖谷奥Ⅰ遺跡土層断面図（1：80）（第4図A-A′，B-B′と一致）

形ははっきりとわからないが細長いタイプで，ややカーブを描く楕円形の可能性が高い。窯の残存長は5m，窯底から窯壁積み石の天端まで最大高が65cm，大きいもので高さが60cm，差し渡し80cmあり，小さな石と組み合わせて2段積みになっているところもある。

写真3　1号炭窯跡作業風景（北西から）

石材はこの谷筋周辺にあるものを用いている。検出時に窯の甲と考えられる赤褐色の焼土が30～40cm堆積していた（図版3－2）。積み石の横に張り付いている石から，窯底が平らであったことが推測できる。遺構の中心に直径が1m位の杉の大木の切株があり，その下に遺構があることがわかっていたので，除去し調査を行った。そのため調査が5日ほど遅れたが，遺構の残存状態がすべて確認することができ，大きな成果があったと考えている。



第6図　1号炭窯跡平面図・立面図（1：60）

第3節　2号炭窯跡の調査

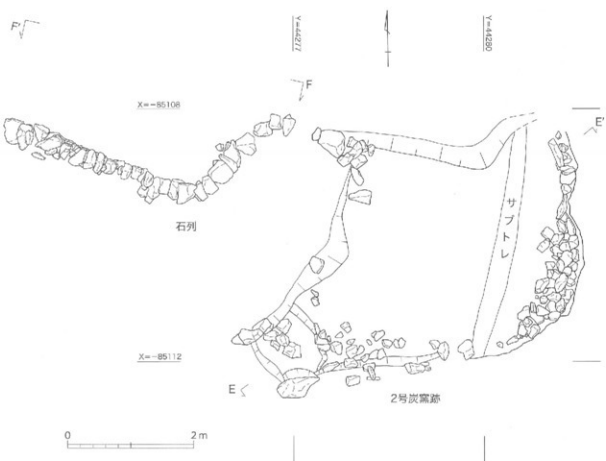
1．基本層序（第5図B-B′）

2号炭窯跡ついては，中央トレンチの層序を確認し調査を行った。全般的には川から流れ込んだ土砂や，調査区東側斜面から崩落した土が堆積したものと考えられる。3層は締まった土で粉炭が混入していることから，2号炭窯跡の操業当時の基盤層であると考えられる。

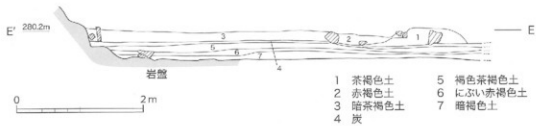
2．遺構（第7・9・11・12図）

2号炭窯跡は1号炭窯跡から北へ約16mに位置する。標高が280.2mであり1号炭窯跡と

写真4　2号炭窯跡作業風景（南西から）

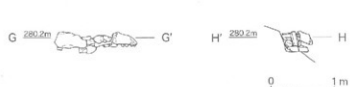


第7図　2号炭窯跡平面図（1）・石列平面図（1：60）

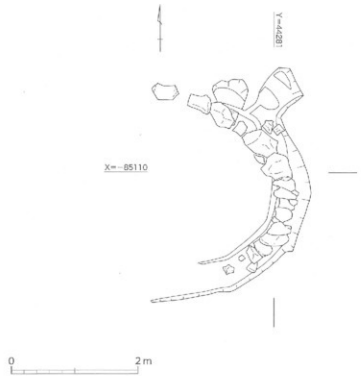


第8図　2号炭窯跡土層断面図（1：60）（第7図E-E'と一致）

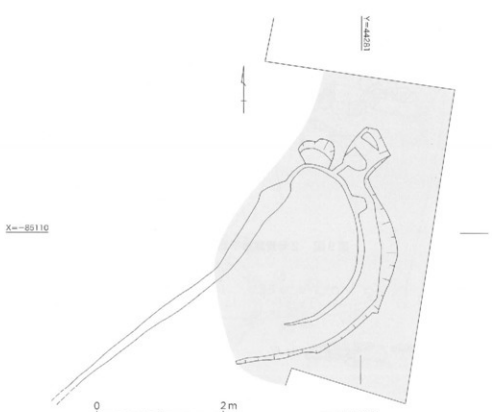
第9図　2号炭窯跡平面図（2）（1：60）



第10図　2号炭窯跡煙道立面図（1：60）（第9図G-G'、H-H'と一致）



第11図　2号炭窯跡平面図（3）（1：60）



第12図　2号炭窯跡平面図（4）（1：60）

同じような高さに構築されている。検出面は崩落した赤褐色の甲がほぼ平らに堆積しており，奥壁は岩盤に二つの曲線を描くように掘り込まれている。焚口あたりは石が散乱している状況で，壁面にタールが付着しており，その下には石が敷き詰めてあった。平面形はイチジク形をしている。規模は奥行き６m，最大幅４m，焚口の幅0.8m，残存高は焚口あたりで0.25mある。

写真５　２号炭窯跡奥壁検出状況（北から）

さらに掘り進めるために，四分法により，土層と遺構の切り合いを観察しながら調査を行った。

甲を取り除くと別の炭窯の側壁の石列を確認した。この時点で炭窯の軸を変えて造り替えられていることを考えた。

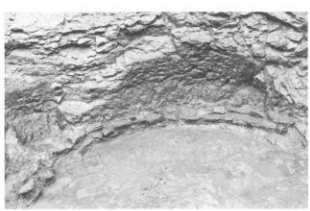


写真６　２号炭窯跡遺構検出状況（西から）

正面の排煙口は，焚口の高さよりわずかに下がっており，差し渡し50cmの板状の石を立てその下に石を挟み煙道を確保し，さらに岩盤まで25cm開けている。岩盤にタールが付着していることから，煙道はここまで続いていたことが確認できる。検出時には石を詰め煙道を閉塞した状態であったので，新しい窯を造る際に廃絶された可能性が高い。

さらに別の場所に煙道を２つ確認した。５層は床面で比熱により硬く締まっており，その上面に炭が薄く張り付いている。

床面を掘り下げると，曲線を描くように窯壁に用いてある石列を確認した（第11図）。その下には写真６のように小石を２列に置いてある。最下層は岩盤を削平し床面をつくり，幅30cm～50cmの煙道を３ヶ所とさらに小さな溝を付け，焚口の外まで排水できるよう溝が掘られている。

２号炭窯跡周辺には粉炭面（第４図）が広がっており，川に向かってわずかに傾斜している。粉炭面を南北方向に断ち割るためトレンチを入れ状況確認を行った。トレンチのほぼ真ん中あたりが厚く，外に向かってだんだん薄くなっていたが，どのような遺構であったかわからなかったので，類例を確認し今後の検討する必要がある。２号炭窯跡がどのように造り替えられてきたかは，第５章で結論を述べることとする。

第４節　石列の調査

石列は２号炭窯跡から西に向かって石垣まで，やや「く」の字状に約５m伸びている。２号炭窯跡の検出面のほぼ同じ高さである。比較的平たい角礫を使用し２～３段積まれている。石の表面に

第13図　石列立面図（1：60）（第7図 F-F' と一致）

タールが付着しており，炭窯で使用されていた石を2次的に積まれていると考えられる。炭窯を造り替えされた時期か，それより後の時期かははっきりしない。土地の区画を示す石列の可能性もあるがわかっていない。

第5節　石垣の調査

堅谷川沿いに石垣が築かれている。調査前には北端の部分で長さ5m確認できただけだったが，調査の結果，13.6m続いていることが判明した。石垣は高いところで1.4mあり，積み石のほとんどは角礫で，野面積みされている。

ところどころ石が抜け落ち状態は良くないが，石垣の周辺の粉炭面の高さと石垣の高さがほぼ同じくらいであることから，2号炭窯跡を最初に操業する頃には石垣が築かれており，ところどころタールの付着した石が積んであることから，壊れたところは炭窯の不要な石を使い補修されたと考えられる。

写真7　石垣の作業風景（南から）

第14図　石垣立面図（1：100）

第4章　聖谷奥Ⅰ遺跡におけるAMS年代測定

はじめに

聖谷奥Ⅰ遺跡は，島根県出雲市多伎町に位置する。本報は，発掘調査に伴って検出された炭窯の使用年代を明らかにする目的で実施したAMS年代測定業務の概報である。

試料および測定方法，測定結果について

表1に試料の概要，前処理，測定結果をまとめ，図1に較正図を示した。前処理を終えた試料から二酸化炭素を精製，グラファイトに調整しターゲットホルダーにプレス圧入し，測定試料とした。測定には加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いた。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。また暦年代較正には，OxCal ver. 4.15（Bronk Ramsey, 2009）を用い，INTCAL09（Reimer et al., 2009）を利用した。

引用文献

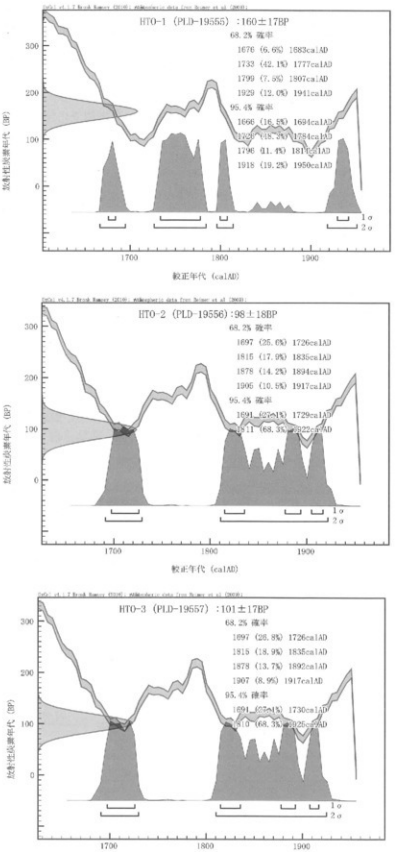
Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009). IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 51（4）, 1111-1150.

表2　試料の概要・前処理・測定結果

試料			前処理	測定年代*1	$\delta^{13}C$	暦年較正用年代	補正年代*2	暦年較正年代		測定番号
NO.	種別	出土遺構		(yrBP±1σ)	(‰)	(yrBP±1σ)	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD　)
HTO-1	炭化材 1.086g	1号炭窯跡	酸・アルカリ・酸洗浄 HCl：1.2N NaOH：1 N	211±18	−28.0±0.11	160±17	160±15	AD1676－1683（6.6%） AD1733－1777（42.1%） AD1799－1807（7.5%） AD1929－1941（12.0%）	AD1656－1694（16.5%） AD1726－1784（48.3%） AD1796－1814（11.4%） AD1918－1950（19.2%）	19555
HTO-2	炭化材 6.724g	2号炭窯跡（中央部）	酸・アルカリ・酸洗浄 HCl：1.2N NaOH：1 N	140±18	−27.50±0.20	98±18	100±20	AD1697－1726（25.6%） AD1815－1835（17.9%） AD1878－1894（14.2%） AD1905－1917（10.5%）	AD1694－1729（27.1%） AD1811－1922（68.3%）	19556
HTO-3	炭化物 97.700g	2号炭窯跡（焚）	酸・アルカリ・酸洗浄 HCl：1.2N NaOH：0.1N	121±18	−26.17±0.11	101±17	100±15	AD1697－1726（26.8%） AD1815－1835（18.9%） AD1878－1892（13.7%） AD1907－1917（8.9%）	AD1691－1730（27.1%） AD1810－1925（68.3%）	19557

*1 $\delta^{13}C$補正前年代　*2 $\delta^{13}C$補正年代



上：１号炭窯跡（HTO-1） 中：２号炭窯跡：中央部（HTO-2） 下：２号炭窯跡：奥（HTO-3）
第15図　暦年較正図

第5章　総　括

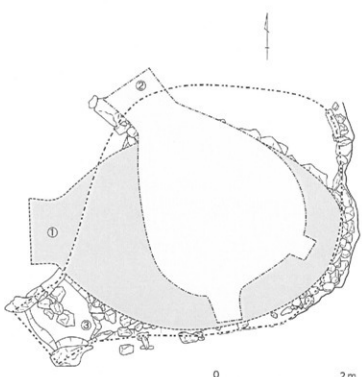
聖谷奥Ⅰ遺跡において，2ヶ所で炭窯跡を確認した。操業年代について，遺物がほとんど出土しなかったため，考古学的に年代を決定することはできなかった。

1号炭窯跡は平面形が楕円形，2号炭窯跡は平面形が円形またはイチジク形をしている。さらに2号炭窯跡は急傾斜面の岩盤を利用し，奥壁はほぼ直角に掘り込み，床面は岩盤を削平し平坦面をつくり，窯体を構築している。このように構築方法が見られるようになるのは，近世以降と考えられている。

また第4章で出土炭化物による放射性炭素の年代測定結果を載せているが，データにばらつきがあるにせよ，江戸時代初期以降から操業されていたと考えられる。

特に2号窯跡は第16図に示したように煙道の痕跡から造り替えをされた可能性があり，一つは煙道が主煙道，副煙道の2本設けられているものもある。さらに掘り下げると岩盤を削平して造られた煙道が3ヶ所見つかり，合計6ヶ所確認することができた。したがって窯の軸を変えながら，わかっているものだけでも4回以上は造り替えが行われ，長期間にわたって操業されていたと考えられる。

規模については，近世以降の炭窯跡は全長4m前後，最大幅3m前後を境にして大型と小型に分



①➡②➡③の順に造り替えられたと推定される

第16図　2号炭窯跡造り替え模式図

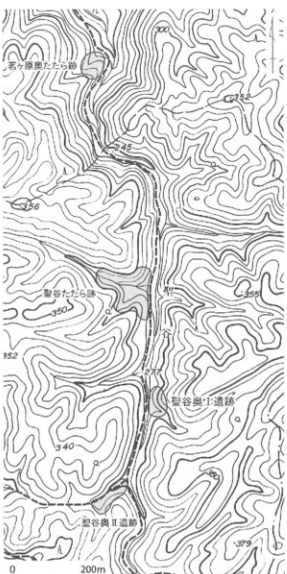
けられ，大型はたたら製鉄用の大炭を生産した炭窯であったことが推測され，これに対し小型の炭窯は近世になると金属加工以外に炊事や暖房など一般生活用に需要が増加していくことから，生活用あるいは何か特殊な用途に用いる木炭を生産した炭窯ではないかと考えられている（安間　2007）。このことから第16図に示したとおり，①については焚口と煙道が検出され全長が6ｍあり大型の炭窯であり，周辺には田儀櫻井家関連製鉄遺跡があることから，たたら製鉄用の炭窯の可能性が高い。

この聖谷奥Ⅰ遺跡の周辺には中世後半期（14世紀後半～15世紀）に操業した屋敷谷たたら跡，江戸時代初期（16世紀後半～17世紀後半）に操業した茗ヶ原奥たたら跡，近世初期（17世紀後半）から明治23年（1890）まで田儀櫻井家がたたら製鉄の本拠地（宮本鍛冶山内遺跡）を置いて製鉄を行なった地域であり，製鉄業が中世から近世まで行なわれた地域である。

さらに聖谷奥Ⅰ遺跡から聖谷川を300m下った川合いの地には国史跡聖谷たたら跡が所在する。聖谷たたら跡には，たたら跡のほか，享保19年（1734），田儀櫻井家４代当主の宗兵衛清矩の造立の銘が残る地蔵１体が安置されていたことから（註　地蔵本体は市指定文化財，保存上の理由から別の場所に祀られている。現在は石龕のみ残る），田儀櫻井家が経営したたたらが存在していたことがわかっている。聖谷たたらの操業年代は地下構造から出土した陶磁器の年代から18世紀前半と考えられる（出雲市教委2008）。

聖谷奥Ⅰ遺跡出土木炭の放射性炭素の年代測定結果からは，検出した炭窯跡の操業年代と田儀櫻井家の操業期間，さらに言えば聖谷たたら跡の操業年代とリンクする可能性がある。

田儀櫻井家関連の製鉄遺跡で製鉄原料である砂鉄や燃料の供給元を実際に発掘調査で確認した事例は今までなく，今回の調査は初の確認例で貴重な資料を得ることができた。今後周辺地域において年代確定が明確にできる調査事例の増加を期待したい。また，周辺の分布調査において近世の炭窯が確認される可能性も指摘しておきたい。



第17図　聖谷奥Ⅰ遺跡周辺図

参考文献

出雲市教育委員会　2005『茗ヶ原奥たたら跡』林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

出雲市教育委員会　2008『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書－平成16～18年度の調査－』出雲市の文化財報告1

出雲市教育委員会　2010『田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書－平成19～21年度の調査－』出雲市の文化財報告12

島根県教育委員会　1990『島根県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ集』

島根県教育委員会　1991『塀田上・今佐屋山・米原山遺跡の調査』主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島根県教育委員会　1993『父ケ平遺跡・中ノ原遺跡・タタラ山第1・第2遺跡－製鉄遺跡の調査と記録－』一般県道市木井原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

川瀬正利　1995『たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』溪水社

島根県教育委員会　1997『布志名大谷Ⅰ遺跡　布志名大谷Ⅱ遺跡　布志名才の神遺跡』一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

島根県教育委員会　1997『境原遺跡・谷川遺跡・殿淵山気宅山炉跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

島根県教育委員会　2001『恵良遺跡・萱々炭窯跡・上条遺跡・水戸（三戸）神社跡（上条古墳）・立女遺跡』一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

島根県教育委員会　2003『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

松尾充晶　2004『多伎郷の考古学』多伎町ライオンズクラブ

安間拓巳　2007『山本古代鉄器生産の考古学的研究』溪水社

島根県教育委員会　2009『六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書16

島根県教育委員会　2009『大志戸Ⅱ釘跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書17

島根県教育委員会　2009『大呂奥遺跡・下大呂遺跡・川尻釘跡・新屋敷Ⅰ遺跡・新屋敷Ⅱ遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書18

島根県教育委員会　2010『久城東遺跡・若菜台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6

島根県教育委員会　2010『志谷Ⅲ遺跡・安神本遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書20

多伎村役場　1959『岐久村誌』

多伎村役場　1961『田儀村誌』

多伎町教育委員会　2004『屋形遺跡』林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

図　版

聖谷奥Ⅰ遺跡完掘状況（北から）

1　聖谷奥Ⅰ遺跡調査前全景（北西から）

2　調査前の石垣の状況（北西から）

1　1号炭窯跡検出状況（南西から）

2　1号炭窯跡検出状況（北から）

1　1号炭窯跡調査状況（北から）

2　1号炭窯跡調査状況（北から）

3　1号炭窯跡完掘状況（南から）

1　2号炭窯跡周辺遺構検出状況（西から）

2　石列検出状況（北東から）

図版 6

1　2号炭窯跡検出状況（南西から）

2　2号炭窯跡奥壁検出状況（北から）

3　2号炭窯跡甲の半裁状況（南西から）

4　2号炭窯跡調査状況（南西から）

1　2号炭窯跡煙道部検出状況（西から）

2　2号炭窯跡調査状況（西から）

1　2号炭窯跡調査状況（北から）

2　2号炭窯跡煙道部検出状況（西から）

1　2号炭窯跡床面検出状況（南西から）

2　2号炭窯跡排水溝検出状況（南西から）

3　2号炭窯跡調査状況（西から）

図版 10

1　2号炭窯跡完掘状況（西から）

2　粉炭面断ち割り状況（北から）

報告書抄録

ふりがな	ひじりだにおくいちいせき
書名	聖谷奥Ⅰ遺跡
副書名	林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	出雲市の文化財報告21
シリーズ番号	
編執筆者	景山真二
編集機関	出雲市　文化環境部　文化財課
所在地	〒693－0011　島根県出雲市大津町2760番地　TEL0853－21－6893
発行年月	2012年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
聖谷奥Ⅰ遺跡（ひじりだにおくいちいせき）	島根県（しまねけん）出雲市（いずもし）多伎町（たきちょう）（小田別所（おだべっしょ））	32203		35°13′54″	132°39′11″	2011.3.1～2011.7.14	250m²	林道宮本聖谷線開設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
聖谷奥Ⅰ遺跡	生産遺跡	近世	炭窯跡	なし	近世以降の炭窯跡

要約

本書は平成23年（2011）3月～7月に実施した聖谷奥Ⅰ遺跡の発掘調査成果を報告したものである。遺跡は出雲市多伎町の国史跡聖谷たたら跡から南へ300mの急峻な谷あいを流れる聖谷川沿いの河岸段丘上に位置し，約250m²の平坦面に炭窯跡2基を確認した。2ヶ所とも江戸時代以降の炭窯で，1号炭窯跡は土石流により大半は壊れているが，石積みの半地下式の構造で，平面形はやや緩やかなカーブを描く楕円形をしている。2号炭窯跡は平面形が円形またはイチジク形をしており，少なくとも4回以上同じ場所に造り替えられていた。大きなものは全長が6mあり，たたら製鉄用の大炭の生産をした炭窯であった可能性あることから，田儀櫻井家関連製鉄遺跡の原料（木炭）の供給元となる炭窯を考える上で，基礎的資料となるものである。

出雲市の文化財報告　21
林道開設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
聖谷奥Ⅰ遺跡
2012年３月
編　集：出雲市環境部　文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町2760
TEL（0853）21-6893
発　行：出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町70
TEL（0853）21-6874（代表）
印刷　製本：株式会社 報　光　社